

セラムック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No. 27

編集 1993.3.30
発行 佐賀県立九州陶磁文化館
代表者 田中耕作
〒844 佐賀県西松浦郡有田町中部乙3100-1
電話 0955-43-3681
印刷所 山口印刷株式会社
佐賀県伊万里市二里町大里乙3617-5



そめつけろうかくじんぶつもんさら
染付楼閣人物文皿

館蔵資料

肥前・有田皿山

17世紀前半

口径20.0cm 高さ5.3cm 底径7.3cm

初期伊万里様式の染付皿である。口縁が立ち上がり、やや深めに作られている。水辺に家屋が建ち、家の中に人物が独り座る。中空には三日月が出ている。見込み左側に「傲夏筆意」の字句が入る。この字句は中国・明末の「八種画譜」などの絵手本にもみられ、有田・天神森窯でも同様の字句の入った陶片が出土している。

特別企画展のお知らせ

平成5年度特別企画(世界・焔博プレイベント)

世界の染付展

○主旨

染付は磁器の中で最も多く生産され、今日まで磁器製品の主流を占めてきた。基本的な技術は同じであっても、中国、朝鮮、日本においてそれぞれ特有の染付が作られている。また年代によっても染付の表現は微妙に異なっている。中国においては14世紀、朝鮮は15世紀、日本は17世紀に染付の生産が始まった。他の国々でも磁器の開始とともに染付の生産が始まり、東洋においては中国、朝鮮、日本、ベトナムなどの染付があり、ヨーロッパにおいてはドイツのマイセン染付などが知られている。また磁器ではないがオランダのデルフト窯においては中国や日本の染付を写した陶器が作られている。本展では染付に焦点をしぼり、中国と伊万里における染付の展開を軸とし、各国の染付との交流を紹介するものである。

○主催

佐賀県立九州陶磁文化館

○会場

佐賀県立九州陶磁文化館 第1・第2・第3展示室

○会期

平成5年9月24日(金)～10月31日(日)

休館日 9月27日(月)、10月4日(月)、18日(月)、
25日(月)

○観覧料

大人 510円(410円) * ()内は20名以上の団体

大学生 250円(150円)

小学・中学・高校生は無料

○図録

展示品の図録を刊行する。

○講演会

染付に関する講演会を開催する。

○展示構成

中国50点、朝鮮10点、伊万里(日本)150点、鍋島
10点、ベトナム10点、マイセン5点、デルフト10点
イスラム5点 計250点



染付牡丹唐草文瓶

元 14世紀 上海博物館蔵



染付葡萄文大皿

明・宣徳 15世紀 上海博物館蔵



染付束蓮文大皿
明・宣徳 15世紀 上海博物館蔵



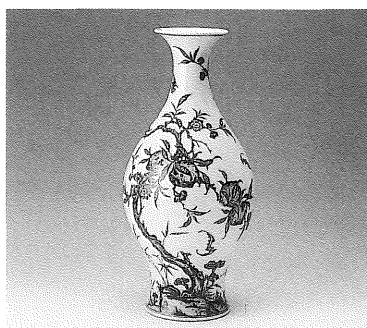
染付雲龍文鉢
明・宣徳 15世紀 上海博物館蔵



染付携琴訪友文三足香炉
明・弘治 15世紀 上海博物館蔵



染付獅子人物置物
明・万暦 16~17世紀 上海博物館蔵



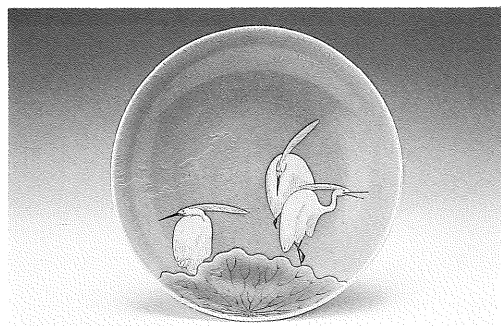
染付仙芝祝寿文瓶
清・雍正 18世紀 上海博物館蔵



染付牡丹梅文四連瓶
清・乾隆 18世紀 上海博物館蔵



染付山水唐草文輪花鉢
有田 17世紀 九州陶磁文化館蔵



染付鷺文三足皿
鍋島 17世紀 九州陶磁文化館蔵

展覧会のお知らせ

柴田コレクション展(Ⅲ)

○主旨

柴田明彦・祐子ご夫妻から、平成4年度に寄贈を受けた江戸時代の有田磁器 323件 627点を展示いたします。

柴田氏ご夫妻からは、これまでに1284件2775点におよぶ有田磁器の寄贈を受け、「柴田コレクション展(Ⅰ)」・「柴田コレクション展(Ⅱ)」として一般に公開し、17世紀前半から18世紀後半までの有田磁器の流れが示されました。

今回の展示では、17世紀前半の有田磁器の水指や香合などの茶道具や、かつては古九谷と呼ばれた有田の初期色絵磁器などが特徴的です。器形も皿・鉢・碗をはじめ、壺・水指・瓶・水注・香炉・火入・香合など多岐に渡り、有田磁器の多様性を知ることができます。

本展は、柴田コレクションの常設展示室のオープンを記念して、平成4年度に寄贈を受けた有田磁器を一般に公開・展示するものです。

○主催

佐賀県立九州陶磁文化館

○会場

佐賀県立九州陶磁文化館 第2・第3展示室

○会期

平成5年5月14日(金)～6月20日(日)

休館日 5月17日(月)、24日(月)、31日(月)、

6月7日(月)、14日(月)

○観覧料

大人 200円(150円) * ()内は20名以上の団体

大学生 150円(100円)

小学・中学・高校生は無料

○図録

展示品の図録を刊行する。

○記念行事

会期中に記念茶会を行う。

○展示作品

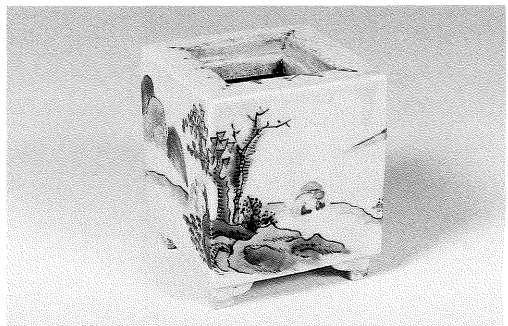
有田磁器 323件 627点



染付楼閣山水舟遊文水指
有田皿山 1640～50年代



色絵松梅唐子花唐草文瓢形瓶
有田皿山 1640～50年代



色絵薄瑠璃山水舟遊文角香炉
有田皿山 1640～50年代



色絵岩鳥窓絵紗綾形梅花文隅入菱形皿
有田皿山 1650～60年代

行事・展覧会スナップ

第3回

九州近世陶磁研究会

平成5年2月6日～7日に、第3回九州近世陶磁研究会が開催されました。同研究会は九州の近世陶磁の情報交換および共同研究の場として、平成2年の12月に発足し、第1回研究会を開催しました。毎回、九州の近世陶磁についてテーマを設け、生産地側の九州の研究者や文化財担当者、また消費地である東京や関西の研究者などによる研究発表ならびに討論を行ってきました。

今回の第3回研究会はテーマを「唐津焼」とし、江戸前期の唐津の古窯跡調査成果と、唐津焼と関係の深い韓国の16世紀の窯について相互認識をはかり、かつ両者の異同について検討することとしました。

鄭良謨先生（韓国国立中央博物館・学芸研究室長）により「朝鮮王朝前期のやきもの」と題して記念講演をしていただき、大橋康二（当館・学芸課長）の「肥前の陶器」、中島直幸氏（唐津市教育委員会）の「小十窯跡の調査成果」などの研究発表・事例報告が行われました。最後に鄭良謨先生を交えて、唐津焼諸窯と朝鮮王朝の陶器窯について、窯の構造、道具また製品などの面からそれぞれの特質と相違点を検討する討論会が行われました。



鄭良謨先生の講演会のための参考陶片
(16～17世紀の韓国出土の陶磁片)

陶芸文化講座

平成5年3月6日に、当館講堂において陶芸文化講座を開催いたしました。今回は神戸市立博物館・学芸

員、岡泰正氏に「V・O・C交易と東洋陶磁—やきものを通してみる東西交流—」と題して講演していただきました。オランダ東インド会社の交易品、特にV・O・Cの沈没船からの引き上げ品を中心にやきものの東西交流について、スライドを交えて約2時間、話をされ、窯業関係者や一般の方々熱心に聴講されました。



講演会風景

第24回デザイン科卒業制作展・第4回窯業科卒業制作展

有田工業高校卒業制作展

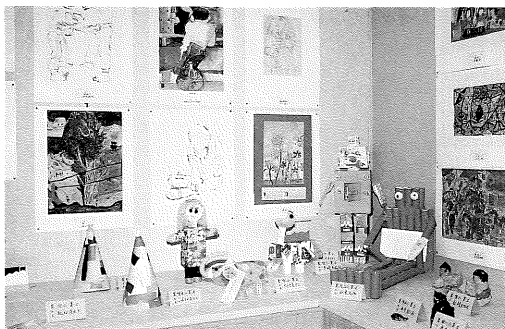
平成5年1月26日から31日まで、第1展示室および展示ホール、エントランス・ホールにおいて有田工業高校卒業制作展が開催されました。デザイン科としては第24回（当館での開催は第19回展から）、窯業科が加わって第4回を数え、窯業科の陶芸作品や課題研究またデザイン科のグラフィック作品、インテリア作品、ビデオによる映像作品など日頃の実習や課外活動の時間に制作された作品が展示され、多くの観覧者で賑いました。



展示風景

第11回西松浦郡小中学校 学童美術展

平成5年2月4日から2月14日まで、第1展示室において、第11回西松浦郡小中学校学童美術展が開催されました。小学生の絵画、陶芸、紙や粘土の造形、また中学生の彫塑、絵画、陶芸、木彫の作品などが展示されました。なかにはダンボール箱や牛乳パックで作ったロボットなど創意工夫をこらした作品も多く、見る人を楽しませてくれるものでした。



展示風景

第4回九州陶磁器 デザイナー協会展

平成5年2月23日から2月28日まで第1展示室において、第4回九州陶磁器デザイナー協会展が開催されました。毎回、テーマを決めて作品を作っていますが、今回のテーマは「動」です。なかなか難しいテーマですが、渦や波をモチーフにしたものや、実際に揺らしたり、回転させたりするものまで多様な造形を提案して、訪れた方もしきりに感心していました。



展示風景

第7回有田窯業大学校 卒業制作展

平成5年3月9日から3月14日まで、第1展示室、展示ホール、エントランス・ホールおよび屋外展示スペースにおいて、第7回佐賀県立有田窯業大学校卒業制作展が開催されました。本科生と研究科生の作った食器のセット、蓋物、陶板パネル、人形、照明器具やスピーカーなど、また短期研修生のロクロや絵付けの作品などが展示されました。



展示風景

第8回有田陶交会展

平成5年3月16日から3月21日まで第1展示室において、第8回有田陶交会展が開催されました。今年のテーマは「旅と器」で、旅に関連する食器などが展示されました。また関連催事として、当館の講堂において、「旅情」や「インディ・ジョーンズ」など旅をテーマにした映画が上映され、旅の雰囲気にはたっていました。



展示風景

シリーズ

やきものに見る文様 (24)

はっ け
八 卦 文 様

「はっか」とも読み、やきものの名称としては「算木文」とも呼ばれる。「八卦」とは、もともと古代中国の「易」に由来し、一般に占いに用いられるが、中国で発達した世界認識の理論・方法でもある。「易」によれば、世界の根本は「太極」と呼ばれ、そこから「陽儀（一）」と「陰儀（一）」が生じ、さらに分れて「四象（太陽；＝、少陰；＝、少陽；＝、太陰；＝）」が、そして「乾（≡）」「兌（≡）」「離（≡）」「震（≡）」「巽（≡）」「坎（≡）」「艮（≡）」「坤（≡）」の8つの「卦」、つまり「八卦」が生じるとされる。「一」「一」の数によって、原理的には無限の組み合わせが可能となる。つまり「一」と「一」というふたつの基本要素の組み合わせによって、世界を二進法的に把握する思想である。それゆえ、この基本原理により未来も予測可能であり、占いとしての性格ももつ。「易」による占いではそれぞれの「卦」をふたつ組み合わせた「六十四卦」をつくり、それぞれの「卦」がもつ意味を読み解き、未来を占う。写真の作品は、中央に八卦の「乾」を書き、周囲に八卦文を均等に配している。この作品は八卦を正確に描くが、初期伊万里の八卦文には、「≡」のみを8つならべたものや、八卦文同士が接続し、雷文のような形になるもの、あるいは4つしか「卦」を描かないものなどさまざまがある。これは、絵書きが「八卦」の意味を正確に理解せず、単にデザインとして見たか、省力化の結果と考えられる。いずれにしろ、文様がその本来の意味を失い、変形していく好例といえよう。（渡辺芳郎）



青磁陽刻寶字宝珠算木文八角台鉢

有田 1650～70年代 館蔵(柴田夫妻コレクション)

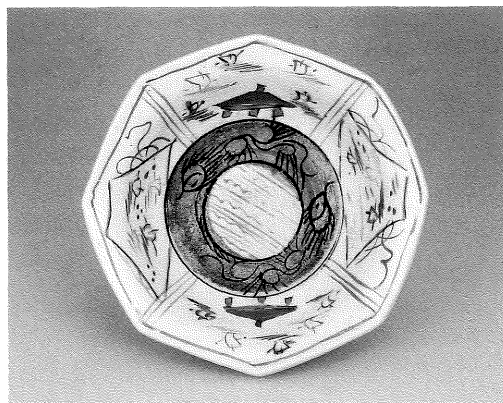
シリーズ

やきものの技法 (24)

かさ づ じゃ め づ
重ね積み② 蛇の目積み

皿や鉢の内側に蛇の目状に釉剥ぎし、上に重ねる皿や鉢の高台が釉剥ぎした部分に乗るようにして焼成する方法。肥前の陶磁においては、17世紀初頭からこの技法が見られる。磁器の蛇の目釉剥ぎは、砂目積みの技法と同じ時代に出現するが、砂目積みの技法が初期のみに行われるのに対し、蛇の目積みは江戸期を通じて続く。唐津焼の場合は銅緑釉や鉄釉の皿によく見られる。

皿や鉢の見込みをドーナツ状に釉剥ぎするのは、器を回転させカンナで削り落して行う。このとき素地が素焼きをしない生の状態であれば、釉薬だけでなく素地も削り取られる。出来上がりの作品の蛇の目の部分が周囲より明らかに窪んでいれば、生掛けと考えることが出来る。



色絵楼閣山水文八角鉢

薩摩・平佐焼 19世紀 館蔵

重ね積みは本来量産の技法であり、見込みに傷がつくことから高級品に用いられることはほとんどない。蛇の目積みの技法は釉薬を剥ぎ取るため、その部分は光沢がなくざらざらしている。こうした欠点を補うため、重ね積みで焼成した後、上絵付けで加飾する場合がある。17世紀後半の有田の色絵磁器から19世紀の平佐焼まで幅広く行われている。写真の作品は平佐の色絵磁器であるが、本焼きは重ね積みされている。見込みを蛇の目状に釉剥ぎした後本焼きし、蛇の目の部分に黒で龍文を描き、さらに緑の上絵の具を全体に塗っている。（鈴木由紀夫）

陶磁資料寄贈者芳名(敬称略)

〔平成4年4月1日～5年3月31日〕

九州陶磁文化館に資料をご寄贈いただきましてありがとうございます。ご寄贈いただきました資料は、永く保存すると共に、研究・展示等に供したいと存じます。今後とも、ご協力をお願い申し上げます。

ご寄贈いただきました資料は、新収蔵品展(平成5年9月4日～9月12日)に展示し、広く県民の皆様にご高覧いただく予定です。なお、柴田明彦・祐子ご夫妻からご寄贈いただいた資料は、柴田コレクション展(Ⅲ)(平成5年5月14日～6月20日)で、公開・展示いたします。

金子富江	東京都	染付兎椿文皿、色絵三果文皿
工藤吉郎	東京都	三彩手塩皿
家永茂子	佐賀県	陶磁器図案資料一括
小川大樹	長崎県	染付草花唐草文大皿、三彩酒注
野田敏雄	福岡県	染付松紅葉文角皿、白磁丸瓦
久原耕蔵	佐賀県	染付波濤鯉文大德利
熊谷マサ子	福岡県	上野茶碗、上野文琳茶入、上野大海茶入、上野九壺茶入
森山 功	佐賀県	黒釉燈明具
柴田明彦	東京都	染付葡萄陽刻唐草文皿など
柴田祐子		計 323件



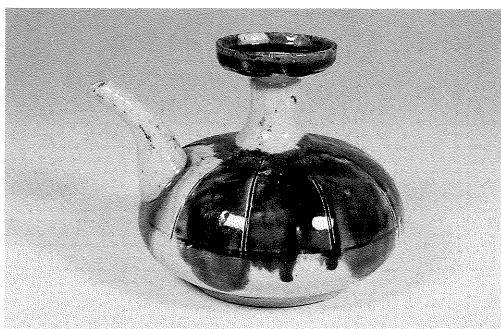
そめつけうさぎつばきもんさら
染付兎椿文皿

有田皿山 17世紀後半 金子氏贈



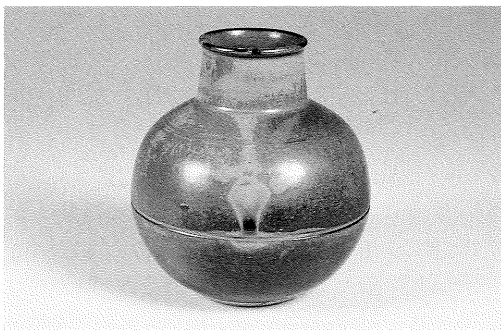
そめつけまつもみじもんかくざら
染付松紅葉文角皿

肥前・白石焼 19世紀後半 野田氏贈



さんさいしゅちゅう
三彩酒注

琉球・壺屋焼 19世紀 小川氏贈



あがのまるつぼちやいれ
上野丸壺茶入

熊谷紅陽作 熊谷氏贈

利 用 案 内

開 館	午前9時～午後4時30分 月曜休館 年末年始(12月28日～1月4日)休館
観覧料	一般200円(150円)／大学生150円(100円) 小・中・高校生は無料。 ()内は20人以上の団体料金。但し、特別企画展の場合は、その都度に定めます。
交 通	佐世保線有田駅下車徒歩10分